出藍文庫

1-1

浦風とおじさん「影」他二編

近藤貴弥 著

目次

浦風とおじさん「影」……五
金剛と提督「初夏と蝶」……三一
時雨と提督「恋煩い」……五三

浦風とおじさん「影」

帰省から帰ってきた時のことである。家の鍵が開いていた。泥棒かと思い耳を澄ませてみたが、慌てたような足音はしない。身を潜めて息を殺し、私が玄関から離れるのを待っているのだろう。この家で金になりそうなものは、私の書斎にまとめて置いてある。泥棒が居るとすれば、まだそこを漁っていることだろう。

廊下で両の袂に手を忍ばせ、何か身を守るようなものはないかと探ったが、手拭い程度しかない。書斎の障子は大きく開いており、中の様子がはっきりと見えて驚いた。

色の白い垢抜けた少女が、文机の上に広がっていた原稿を片付けている。こうでもないあでもないと言いながら、順番になるように整えている。その姿に既視感を覚え、私は声をかけようとして書斎へ足を踏み入れた。敷居がきしんだが少女は私に気付かない。声をかけようと思ったが、既視感の正体に気付き、言葉を奪われた。

少女は机の端に置いてあった盆の上に急須や湯呑みが置いてあることに気付き、洗いに行こうと振り向いた時、私と目が合った。けれども少女は驚く素振りを見せず、微笑んだ。

「せんせ、おかえり」

言葉を失ったのは、姪である浦風が、亡き妻によく似ていたからであった。胸にかつての

朗らかな思い出が蘇ったが、すぐに何故、浦風がこっちに来ているのかと疑問に思った。帰省の際に浦風が居ないことは知っていたが、こっちまで来ているとは誰も教えてくれなかった。皆が浦風がいないことに心配していなかった様子を考えてみると、私には言わないでほしい、と事前に口裏を合わせたのだろうか。

浦風から盆を受け取り、台所に向かう。浦風は何も言わず、私の後ろを着いてくる。

「それくらい……」

「ここは私の家なんだ、私がやる」

「うち、お客さん？」

「そうだ」

「何で？」

「何が？」

「お父さんが何しとるんやって」

「兄さんが？」

「手紙の返事」

「心配し過ぎだよ」
「せんせ、出不精じゃけぇ」
茶と菓子の用意をしながら、この前来た者が置いていった雑誌を浦風に見せた。表紙には私の名前もあれば、知った名前が幾つか並んでいる。浦風は雑誌に目もくれず、卓袱台に積み重ねられた本や郵便物を片付けている。
「私の名前はこうしてここにあるんだから、兄さんが悪いよ」
「お父さんは娯楽小説を読むほど暇じゃないけぇ」
こうして物を書いて、糊口を凌ぐように勧めたのは兄さんだった。私は兄さんのように軍人になりたかったが、胸を患い、軍人になれなかった。入退院を繰り返し、まだ帝大に学んでいた頃、兄さんがある雑誌を持ってきた。もう兄さんは軍人として呉で働き、まだ浦風がいない頃だ。そんな兄さんが、一つ書いてみたらどうだ？　良い気分転換になるだろうと懸賞小説について教えてくれた。そういうものを書くことが得意ではなかったが、普通の人間とは違う環境に身を置いていたことが功を奏し、一等賞を得て、今も書き続けている。
「〆切がないと書けんじゃろう？」

茶と菓子を用意して居間に戻ると、浦風の厳しい声が飛んできた。物がなくなった卓袱台には、一枚の葉書が置いてあった。兄さんからの葉書だった。忙しいと思うから返事は別に書かなくてもいい、という主旨が葉書には書いてあった。だから、私は返事を書かず、しまい続けていた。葉書を適当な所にしまい、浦風に茶と菓子を出しながら微かに怒りを露にした。

「勝手に掃除をするのは困る。どこに何があるのか分からなくなるじゃないか」

「うちが来て掃除したらいいじゃろう」

「それも兄さんが？」

「うちの案」

「それくらい自分でできる」

「本当？」

「それで、何かあった？」

「何か？」

小首を傾げる浦風だったが、何の用事もなく私の所に来るとは思えない。こっちに来ると

いうことは、何か展覧会だとか演劇だとか楽しみにしているのだろう。まだ妻が存命だった頃、私からそういう所に行こうかと尋ねると浦風は笑顔になって、妻の服で着飾ることが何度かあった。浦風は妻とも出掛けたかったのか、よく妻の手を引っ張り一緒に出かけようと言っていた。が、妻は家のことがあるのでと拒んでいた。実際に家のことがある日もない日も、妻はそう言って断っていた。

妻は快活な浦風が得意ではないように見えた。今になって思えば、胸を病んだ私と妻は容易に外に出られず、自由に動ける浦風への羨望や嫉妬があったのかもしれない。

長くなかった私達の結婚生活の中には、絶えず浦風がいた。兄さんが仕事で家に居ないことが多く、祖父や祖母ばかりの実家は、浦風にとって面白くない所だっただろう。浦風にとってしてみれば、東京で過ごす方が良かったのかもしれない。妻も浦風が得意ではなかったが、浦風が家に居る時は笑顔が多かった。血の気の薄い白い頬に笑みが浮かぶことが何度かあった。まるで娘のようですね、と妻が言ったことを私はまだ覚えている。

私はそういう妻の微笑を思い出す度に胸が痛くなった。私も妻も身体が丈夫ではなかったため、私達の子供のことは話さなかった。話す必要がない、と判断していたのである。しか

し、もし妻が子供を授かりたいと言っていれば、許したであろうか。将来のことを考えられた妻に、どのような言葉をかけていただろうか。

子供が大変になるから、と言っただろうか。あるいは、そこまで言うのならばと考えを改めただろうか。今となってはもう確認のしようがない。それは同時に、妻が私達の結婚生活について、どのような将来を描いていたのか、ということすら分からない証明でもあった。私達の将来は、他の夫婦がそうであるように、夫である私が全てを決める権利があった。だから、子供を授かろうとしなかったし、故郷に帰ることもしなかった。この街で、二人で過ごそうと決めた。しかし妻は本当にそう思っていたのだろうか。

私と妻の会話の中に将来のことが多く出てこなかったのは、やはり私も妻も先が長くないことを知っていたからであろう。しかし、今、ここには浦風がいる。まだ若い少女がいる。この娘を残して、去るわけにはいかなかった。どうしたのか、という問いを投げたところで、浦風がしっかりとした答えを持ち合わせていない。まだそんなことを考える歳ではない。兄さんや兄さんの嫁がゆっくりと、浦風の年齢に合わせて様々なことを話し、教えることだろう。しかし、兄さんはしばらく仕事に追われることだろう。

「兄さんはまだ帰ってこない？」
「返事書いたら分かるじゃろう？」
「また後で書くよ」
「せんせ、お仕事より先にやることは？」
浦風は、私を指差し、真面目な調子で訊いたが、どう答えるのか分かっているのか次第に表情を崩し、呆れたように笑う。私が原稿に忙しくなると、妻もよくこんな顔をしていた。妻は決して、私に強く物を言うようなことはなく、それでも、自分の思っていることは確かに口にした。私と衝突するのを避けているようだったが、原稿に詰まってくるとそういう妻の気遣いが神経に障った。私は何度、そういうふうに言わず、正直に言いたまえと妻に言ったのか分からない。妻は私にそう言われると、これ以上はとても、と弱々しく答えた。私も妻にそう言われる急に弱々しくなってしまい、言葉を並べ立てるようなことはせず、黙々と原稿の升目を埋めた。そうして、予定の升目を埋めると、己の発言に後悔し、必ず謝った。
「返事だろう？　済まない。兄さんに今度会ったら、伝えておいてほしい」
「いつ帰ってくる分からん」

「会いに行けばいいじゃないか」
「怖い」
「私だって同じさ」
「優しいよ」
　私は私の食い扶持を得るために書いているが、兄さんはもっと沢山の人間の命を預かっている。神経的になってしまうのは仕方のないことだろうが、実の娘を放り出してまで、その役目を貫かればならないのだろうか。兄さんを含め、海軍という組織は一体何と戦い、勝利を収めているのだろうか。報道されることはあるが、彼等との争いによって、私達の生活が脅かされることはない。それでも、その争いに家族が関わっているとなると何者と戦っているのか知りたくなってしまう。
「兄さんは一体、何と戦い、指揮を執っているのだろうか?」
「何も話してくれんけん、分からん」
　私や浦風が訊いても、兄さんは黙秘を貫くことだろう。兄さんは昔から口数が多い人ではなかったし、動いている方が性が合っている人だった。兄さんが戦禍に巻き込まれた時、浦

風達家族はどうなるのだろうか。私一人では、兄さん達の家族まで面倒を見ることはできない。医師から、長く生きたければ高原病院にでも、と勧められてもおかしくない人間なのだ。私のことを知っている兄さんが、陸地で生活する浦風達のことを考えていないとは思えない。

「兄さんが最後に帰ってきたのは、いつ？」

「……去年？」

浦風の答えには拭えない疑問があった。実家は、祖父母と兄さんの妻と浦風しかいない時間の方が多いということだろう。

「電話は？」

「時々？」

答える浦風の瞳の奥に微かな寂しさが見えたのは、私の思い過ごしだろうか。思い過ごしであろうと、父が家に居ないというのは寂しいことだ。何故、居ないのか浦風は分かっているからこそ、家ではそういう寂しさを面に出さなかったことだろう。笑顔で、物分りの良い子供として過ごし続けた。浦風にとってしてみれば、何もないことだったのかもしれない。そうするのが当然だと考え、それ以上のことは何も思わなかったであろう。浦風にそのよう

15 浦風とおじさん「影」

な思いを懐かせるのは、私達大人の都合でしかない。

「……少し、ゆっくりしていくといい。遠い所から来たんだ」

「せんせ？」

「私の仕事の邪魔をしなかったら、それで良いよ」

「やっぱり優しい」

「気のせいだよ」

かなり前に兄さんから送られてきた葉書の返事を考えるため書斎に戻ろうとすると、浦風も後ろをついてくる。文机の前に腰を下ろし、眼鏡をかけ、原稿用紙に万年筆のペン先を置き、いくつかの升目を埋めていくと自然とペンは辷りだす。後ろから視線を感じ振り向けば、書斎の端で浦風が嬉しそうな顔をして、私を見ている。

気恥ずかしさを覚えながら文机の方に向き直し、端にまとめられた新聞の中から今日の朝に読んだ新聞を引っ張り出し、目を通す。新聞には映画や演劇の案内が掲載されていた。

浦風を手招くと、猫のように近寄り、背中に手を這わせ、肩の方から顔を出す。私は皺だらけの指で映画の題名を一つずつ追いながら、声を出したが、浦風はどれも知らない様子で

私の顔を見つめる。演劇の方も同様で、どこにも浦風の分かるような作品はなかった。

浦風がどこか行きたいという希望がないことは少し前に確認したばかりだというのに、私は浦風と共にどこかに出かけようということばかり考えていた。もしこれが妻ならば、私は構わず、原稿を書き進めたことだろう。しかし、相手が浦風に変わると何かしなければならないという思いに駆られる。ここも兄さんの家と変わらないと思われてしまうのを防ぐために、どこかに出かけようという思いが膨らんでしまう。

この家は、私と妻のために建てた家であり、いずれ死に行く者が重い荷物を一つまた一つと減らすための場所だ。浦風が居心地の良さを覚えていいような所ではない。不必要な物は全て売り、この部屋で今も使われているのは寝床と書斎程度だった。こんな家を浦風が楽しめるはずがない。

「少し、出かけようか。着替えるから待っておいて」

私はそう言って、重い腰を上げた。着替える前に、居間から一冊の雑誌を持ってきて、浦風に差し出した。雑誌には、私の最新の連載が掲載されている雑誌だった。浦風はその雑誌を受け取ると、こういう言葉を返してきた。

「もうせんせのは読んだんじゃ」
「他のも読んでみるといい」
「難しいの苦手」
「娯楽小説なんだろう？」
「そ、それは……！」
浦風の小言から逃げるように寝床へ向かう。出かけようと言ったが、どこか予定があるわけではなかった。この暑い中、歩くのも疲れるだろうし、浦風の好奇心を刺激してしまえば、疲労困憊になるのは私だ。となれば、やはり家で仕事をしている方が良いのかもしれない。けれども、私が仕事している間、浦風はどうするのだろうか。精々、本しかないこの家では、浦風は飽きることだろう。兄さんに似ていれば黙々と読み続けることだろうが、兄さんの嫁に似ていたら、すぐに文句や不平や退屈という言葉が飛んでくることだろう。
洋装に着替え、パナマ帽を被り、書斎へ顔を出した。浦風は熱心に雑誌を読んでいた。
「準備は？」
浦風は私の声を聞き、視線を上げ、丸い目を更に丸くする。

「そんなに粧し込んで、うち、そんなんないんじゃ？」
「それで十分だよ」
「せんせだけ、ずるい」
「ずるくない。これは礼儀なんだよ」
「うちもやる！」
「紅とかならあるよ」
「いいの？」
「捨てるよりかは」
浦風と寝床へ行き、畳に座らせる。箪笥の小さな抽斗の中には、未開封の紅や白粉がしまってあった。妻の遺品を整理している時、捨てられなかった品だ。妻はよく化粧をしていた。化粧の時間が長いことを、私は何も言わなかった。顔色が優れないことも、唇の色が良くないこと、妻の肉体から色が抜け落ちていくことを、私は何も言わず、それまでと変わらないように接するように努めた。普段と変わらないように接することが、彼女の精神を追い込んでしまったのではないか、と後悔したことは何度もある。頭では私も妻も長くないと分かっ

ていたが、私の心がその現実と直面するのが恐ろしかった。妻が痩せ、紅もさせなくなり、蒼い肌を晒されるのが恐ろしかったのだ。

あまりに寝床に籠もると、心配して様子を観に行くこともあった。そして時として、膝を折り、丁度、今の浦風と同じように視線を合わせて、その唇に紅をさしたり、白粉を塗ることもあった。

浦風の唇は私の思っていたよりも柔らかかった。驚いたが余計な力が入れてしまわないように細心の注意を払ったが、動揺が伝わったのか浦風の唇は微かに震える。私が何も言わないと浦風も何も言わなかった。

「上手じゃねぇ」

「長生きだからね」

浦風の白い顔の中で、紅を引いた唇だけが不自然なほどに色鮮やかで、調和を崩している。浦風の顔立ちと合わず、紅だけが嫌に年老いていた。しかし、妻にはよく似合い、強く生きる色を示していた。

出掛けようとして、浦風がいつも被っている白い帽子がないことに気付いた。書斎や居間

を見てみたが、どこにも見当たらない。
「帽子は？」
「忘れたんじゃ……」
「家に？」
「うん」
「これでも被っておきなさい」
私は自分のパナマ帽を被せた。浦風は大きな帽子の隙間から、私を見上げる。
「大きい」
「少しの間の辛抱だよ。新しいのを買ってあげよう」
「本当？」
「ないと困るだろう？」
外は暑かった。晴天の下、顔を歪めた私と比べて、浦風はパナマ帽の中で嬉しそうに笑っている。浦風は軽い調子で歩を進め、先を行く。妻の歩幅が染み付き、杖をつく私との間に差が生まれるようになると、浦風は立ち止まり、私の方に振り向き笑顔を見せる。

「せんせ、ファイト！」
「もう少しゆっくり歩こう」
「十分ゆっくりじゃないん？」
「元気だねぇ」
何度かそういうやり取りをして、浦風はようやく私と歩調を合わせてくれた。夏に出歩くということを、私は全くしなかった。胸を患った人間にとって、夏は他の季節と比べて過酷なものだ。じりじりと確実に体力を奪われ、満足に食事を摂れず、秋を迎えた頃には亡くなるということすら有り得る。だから私と妻は必然的に体力を奪われないように家で過ごすようになり、夏の間は文筆を通して知り合った医師や期日が迫ると社の者が絶えず顔を出してくれた。
妻は病弱なのもあってか、自身を着飾るのを好んだ。私はそういう妻の性質を知っていたから、夏が終わり、涼しくなった頃、こうして出掛け、妻へのプレゼントを買うこともあった。プレゼントを持って高原病院を訪れた時、妻は必ず、こう言うのだ。今度は二人で出掛けたい、と。

私は浦風の向こうに見える妻を絶えず相手にしているようだった。ようだったのではなく、事実、浦風の何気ない素振りに妻の気配を覚えている。

「どこ行くの？」

「百貨店だよ」

「……百貨店？」

「きみの帽子を買いに行くんだよ」

「持ってるじゃろう？」

「もう一つあっても悪くないだろう？」

「そうだけど、いいの？」

「いいよ、それくらいの物だったら」

私達は電車に揺られ、百貨店に着いた。西洋の建築物を真似た華々しい内装に、隣に居る浦風が感嘆の息を漏らす。広い店内には幾つもの店が入っており、浦風はそのどれもに目を奪われ、

「ちょっと見ていこう？」

と私の袖を引っ張る。何を買うか決めていた私は浦風の提案を断ろうとしたのだが、私が何か言おうとした時には、もうそこに足を運んでおり、次第に浦風が先を歩くようになり、私を連れ回しはじめる。

目的の帽子屋に着いたのは、日が暮れはじめた頃だった。私は息も絶え絶えで、備え付けのソファに腰を下ろす。浦風はいつまでも元気だった。赤いつば広帽子を手に取ると、被り、私の前に来る。快活な浦風を象徴するような良い色だったが、どこか大人びた印象を懐かせる。

「どう?」

「うん、似合うよ」

「じゃ、こっちは?」

浦風はそう言うと、別の黒い山高帽子を被る。

「兄さんには買わないよ?」

「うちが被るの」

「男性的だね」

「じゃ、これは?」

今度は青いマリンキャップを被る。海を好む浦風らしい。赤いつば広帽子と比べると、浦風の雰囲気と合っており、綺麗な印象を持たせる。

「それも良いね」

「せんせは、どれが好き?」

「私?」

「せんせが選んでくれたのにしようかなって」

重い腰を上げ、私はすぐに一つの帽子を浦風に被せる。白いセーラー帽だった。浦風は私の選んだ帽子に不満でもあるのか、無言で刺々しい視線を向ける。

「もう持ってるじゃろう?」

「これが似合うよ」

妻も白い帽子が似合う人だった。私達が初めて出会った時も妻は白い帽子を深く被っていた。今思い返してみると、それは顔色の悪さを隠すため、という方が強かったと分かる。彼女は己の人生が短いことをあの時既に察しているように、美しい人だった。私は丁度その時、

25 浦風とおじさん「影」

懸賞小説を経て、作家としての力量を試され、ある短編集を書いている途中だった。書いている時にまた心身を悪くするのではないだろうかという不安があり、生き続けるということに激しい疲労を覚えていた。そういう私に、妻はとても眩しく見えたのだ。一生が短かろうと着飾って生きる彼女が羨ましく、憧れた。そして、私達は同じ屋根の下で暮らす前に、共に先が長くないことを正直に告白した後、それでもと約束して住むようになった。

「じゃ、これにする」

浦風が妻と違うことは、分かっている。しかし、浦風から漂う昔の香りに、妻を想起さざるを得ない。浦風がそのことに気付いた時、彼女はどういう言葉を私にぶつけるだろうか。烈火の如く怒るだろうか、泣くだろうか。何であれ、何も伝えず、家に帰した方が良い。

帽子屋を後にした私達は、同じ階にある文具屋で便箋を買い、そのまま喫茶店へ入った。喫茶店は閉店が近いのか、疎らに人がいる程度だった。

給仕からペンを借り、兄さんに返事を書く。返事が遅れたことを詫び、何とか生きていることを続け、浦風が来たことも書いた。書き終えた時、ケーキを食べていた浦風の顔から笑顔が消えていたことに気付いた。何か言おうとしているが、どう伝えていいのか迷っている

ように視線が泳いでいる。

「待たせてしまったようだね。退屈だったろう。帰ろうか」

浦風の言葉を聞かず、半ば強引に手をとった。家に帰った頃、もう月が出ていた。風も冷たい。それでも昼の暑さが夜風の底の方に混じっており、むっと顔を顰めたくなる。

浦風に化粧を落とさせるように言うと、私は浴衣に着替えて書斎で彼女を待った。書斎へ入ってきた浦風の表情は真昼のように朗らかなものではなく、所々に固さを感じる。少しの間、沈黙があったが破ったのは浦風だった。

「せんせ、うちな」

小さな声だったが一点の曇りもない力強い調子。それから、また沈黙が生まれた。その沈黙で私は気付いた。今日、浦風は私に何か伝えることがあって訪れた。言う機会はいつでもあっただろう。しかし、今の今まで口にできなかったのは、浦風自身の中でまだ整理できていなかったからだろう。浦風と私との間にそれほど沈黙が必要になることがあっただろうか。あるとすれば、兄さんのことぐらいだろうか。そうなると浦風が私に伝えなければならないこととは……?

私はもう言いたいことが沢山でてきた。しかし、浦風からの言葉を律儀に待った。私から助け舟を出すことは可能だったが、ここで私が口を挟んでしまえば浦風の覚悟が無駄になってしまう。

浦風が打ち明けた瞬間、私はすぐに訊いた。

「お父さんの所に行こうと思うんじゃ」

「どうして？」

「うちが必要だから」

「浦風が？」

「うん」

「まだ子供じゃないか」

「でも……」

言い淀む浦風に、私は静かに言葉を並べる。込み上げてくる感情が喉までせり上がってこないように白髪を震える手で掴み、堪える。

「どうして、皆、私の前から消えるのだろうね。最初は兄さんだった。憧れていたんだ。あ

あなりたかった。でも、私はなれなかった。次は妻だ。妻にも憧れていた。でも、私はなれなかった。そして、きみすら消えようとしている」

言い終えた私の言葉に飛び掛かるように、浦風の叫び声が書斎に響いた。

「せんせは、うち越しに奥さんを見ているだけじゃ！」

浦風の悲鳴のような叫び声に感化されるように、堪えていた感情が迸る。

「似ているんだよ、きみが！　誰よりも愛していた妻に！　愛していた、誰よりも誰よりも愛していた……。私も妻も精一杯生きようとしたんだ。でも、私は生き残っている。生き残ってしまったんだよ……」

浦風の潤む瞳から逃れるように視線を外して認める。私の瞳からも雫が零れ落ちてしまいそうなのを懸命に堪える。

「うちは、奥さんの代わりじゃない！」

「分かっているさ」

「分かってない！　何も分かってない……何もっ！」

浦風はそう言って、片付けた原稿や雑誌を投げつけてくる。私は咳き込みながら、熱の帯

びた言葉を吐く。

「それじゃ、きみを引き留めたらいいのかい？　行かないでほしい、と。また失うのは嫌だからと。この歳にもなって、子供みたいに」

「違う！　違うんじゃ！」

「きみは兄さんの所に行ったら、し、死ぬんだよ！」

浦風が虚を衝かれたように言葉を切った。私は浦風に詰め寄り、細い両肩を震える指で掴んだ。浦風の姿がぼやけるが、声を張り上げ続ける。

「駄目なんだよ！　きみたちはまだ若いんだ。駄目なんだよ。そんな所に行って、どうするんだ。愛も恋も何も知らずに海の藻になってどうするんだい……。きみは、きみは！」

肩で息をする私の胸に浦風の柔らかな拳がぶつかる。二人の涙が袖を濡らす。

「だったら、うちを見て！　うちを！　今晩だけでいいから、今夜だけでいいから。もう、私もせんせも死ぬんでしょう？　だったら死ぬ前に、ねぇ！」

浦風は私の胸に顔を隠し、嗚咽混じりにそう叫んだ。浦風の望みを断ることは、できなかった。浦風がこれからどうなるのか、私にも浦風にも分からない。兄さんにも分からないこ

とだろう。再び、ここに戻ってくるのかすら分からない。私と浦風の最後の逢瀬になることは十分に有り得る。運良く浦風が帰ってきても、私がいないことだって有り得る。

私が妻を失い、独り身を味わったように、浦風も同じ痛みを味わっている。いや、それよりも苦しい痛みを味わっていた。その男が見ていたのは浦風ではなかったのだから。

「……ああ、いいよ。今夜だけなら、きみを浦風として見れそうだよ」

「……ごめん、ごめんなさい」

浦風の震える細い身体を優しく抱き締めた。《了》

金剛と提督「初夏と蝶」

秘書艦でもある金剛は、共に戦い大破となった艦娘を入渠に向かわせ、執務室へ向かう。執務室からは大淀が出て来た。大淀は金剛に気が付くと、微笑を浮かべる。

「そろそろ休んだら？」

「まだやることが残ってますので」

「提督は？」

「中で仕事を」

「そうじゃなくて」

「まだ分かりません」

「集められそう？」

「分かりません。私も忙しくなってきたので……」

この娘も、今ではもう金剛達と同じように前線に立っている。大淀が金剛達と並び立つことになった時、提督に訊いた。大淀が前線に立つことによって、何がどうなるのか、何故、大淀までも前線に立つ必要があるのか、と。提督は、必要だから、と極めて短い返答を示した。金剛は即座に、ならば他の艦娘の練度を上げてもいいのではないかと言い返した。提督

は上の決定だと言って、それ以上の追及を拒んだ。その会話から、提督が何か隠しているのではないかという思いが時々浮上することがあった。

この鎮守府に配属された時から提督の秘書艦を務めている金剛であったが、提督の考えていることはよく分からない。分かっていることといえば、全く執務室から出ないということ程度だ。

執務室に入ると、いつも通り海を背に書類を作成している提督の姿があった。煙草の臭いに金剛は微かに眉根を寄せる。デスクの灰皿は煙草の山が出来上がっていた。提督は暗い目を上げると、笑顔一つ浮かべることなく、金剛に事務的な労いの言葉をかける。低い、泥のように粘り強い声だった。金剛も普段と変わらない明るい調子で答える。

「ご苦労。戦果は?」

「いつも通り殲滅です」

「負傷は?」

「夜戦にて駆逐艦の魚雷を受け、時雨が大破。今はドックに」

「そうか」

金剛は、下がっていい、という言葉が続かないことに気付くと微笑を浮かべ、二人分の紅茶を淹れ始めた。提督は何も言わず、報告書を作成する。

秘書艦だからといって、他の艦娘と変わらない。戦地に趣き、砲撃を重ね、帰還する。それでも一つだけ他の艦娘と変わっているところを挙げるとすれば、こうして執務室で紅茶を淹れ、ティータイムをすることが許されていることぐらいだろう。

あるいは、提督に気軽に言葉を投げかけられるということぐらいだろう。他の艦娘に訊いてみたところ、何を考えているのか分からない人、という評が最も多かった。今も、そしてこれからも変わらないことであろう。

金剛はこの鎮守府に配属されるまでの間、いくつかの鎮守府に配属されていた。提督は皆、共に戦う仲間として交流を図り、轟沈が起きればかけがえない者を失ったかのように涙する。そういう提督が普通だと思っていた。しかし、この提督は艦娘との交流の拒んだ。大破徹底を鉄則とし、轟沈はさせない。轟沈をさせないのは、共に戦う仲間を失うのを恐れているのではなく、練度を上げることの効率の悪さから来るものだった。

配属された日の浅かった時、金剛は提督にこういうアドバイスを送った。

『私達と仲を深めるのも仕事の一つではありませんか？』

『そんな仕事はない』

配属されて日の浅かった金剛は、大淀に提督の情報を集めてほしいと頼んだが返答は今日と変わらない。提督は金剛を初めとする艦娘達に自らのことを知られるのを極端なまでに恐れているようすら見える。それは、失うことを極端に恐れているようにすら映る。大破撤退を鉄則としている作戦で、提督が艦娘を失うということはない。資材のために解体も破棄もしてない。ならば、提督が失うことを恐れているのとは何なのであろうか。もし、金剛と提督の仲が深まれば、何を失うのを恐れているのか分かる時が来るかもしれない。

これらの考えは、全て金剛の予想でしかない。失うことを恐れていることはないことは十二分に有り得ることであり、その方が提督らしいとすら思っている。

金剛は時々、この提督に人間の血が流れていないと思うことがある。赤煉瓦が作った艦娘とはまた違う、完全自動型の機械。淡々と艦娘に命令を下し、戦果を上げる。超人的な身体能力があるわけでもなく、休まず働けるような体力があるわけでもなく、困難な戦況を潜り抜けられるような頭脳があるわけでもない限りなく普通の人間に近く、全く人間の臭いがし

ない機械。

しかし、食事も摂るし睡眠も必要とするし、嗜好品の煙草も常日頃口に咥えており、声の調子が変わることもある。金剛達が普通の少女ではないことは、艤装が証明してくれる。この提督が普通の人間ではないことを証明してくれるものは何なのであろうか。金剛達とこの提督を線引きしているものは、艤装以外に何があるのであろうか。

金剛はこの時、ようやく自分が長い間、物思いに耽けていることに気付いた。提督は紅茶を飲みながら何も言わず、金剛を見ていた。その沈黙を貫くのが、金剛には不気味に感じた。提督は落ち着いた調子で話す。薄い唇から流れるように言葉が降ってくる。

「きみはあの時のことをまだ覚えているだろうか。僕にこんなことを訊いた。仲を深めるのも良いことではないか、と。僕は正直に、そんな仕事はないと答えた。覚えているだろう?」

「何か心変わりでも?」

「心変わり、というほどのことではない。ただきみが秘書艦であり、今後も僕の側にいるというのであれば、齟齬をなくしたいだけだ」

「齟齬？」

「よく分からないという顔だね」

金剛はこの時、提督の言葉の端にどこか嘲笑めいたものが帯びているような気がした。仲を深めないと宣言した提督に嘲笑を浴びせかけられたようで、金剛は胸の底から腹立たしいものが込み上がってくるのを感じた。

「提督の側にいる。そんな権利は私にありませんよ」

「その通りだ。僕が命じれば、きみは秘書艦ではなくなるだろう。しかし、僕は一度もきみを外したことがない」

「提督の考えていることは全く分かりません」

「簡単だよ、きみが轟沈しても代わりが効くからさ」

提督から直々にそう言われ、金剛の胸に大きな波が立つ。提督の言葉が本心から来るものなのかどうかは分からない。しかし、提督は大破徹底を鉄則としている。金剛が轟沈するという可能性はないのではないだろうか。

「大破徹底しない、と？」

「後少しのところまで追い詰めた時、僕はきっと進軍させるだろう」
「上の決定ですか？」
「僕個人の決定だ」
「拒否権は？」
「ない」
「子供みたいですね。たった一回の機会のために……」
「僕達は子供だよ」
提督は胸に帯びたいつもの勲章を冷ややかに見下ろした。それから提督は金剛に一枚の書類を見せる。どこかの鎮守府で艦娘が誤射を行い、死者が一名出たという報告書だった。提督はその報告書を金剛に見せながら、淡々と続ける。
「着任当初から秘書艦にしていた艦娘が行ったことだ。誤射、ということらしい。誤射ならば仕方ない。だが、その提督は、艦娘との仲が上手くいなかったらしい。何故、仲良くする必要があるのか分からない。そう言っていた。その提督は強欲な男でね、そういう精神でありながら、艦娘が傷付き疲れようが進軍を命じた。そうして、艦娘の誤射が起きたわけだ」

金剛は提督の話しを聞きながら段々と己の顔から血の気が引いていくのが分かった。報告書の日付が過去のものであり、提督の話すことも過去の事柄であるということが分かっているのだが、あまりに一致する点が多い。金剛が今、この場で誤射をした時、本部にはどのように処理されるだろうか。過去と同例の案件が起きてしまい、再発を防止するために艦娘と仲良くするようにということや大破撤退の原則が規約に組み込まれるのだろうか。

しかし金剛は誤射をするような艦娘ではない。けれども、提督がもし誤射を望んでいるのであれば、金剛は誤射をしてしまうだろうか。金剛は新しい紅茶を注ぎながら笑顔を努める。

「提督は疲れているんですよ」

「ここに来る前、僕はとある学校で英語を教えていた。難しいことだったけれど何年かやっていた。そしてきみを秘書艦にしてから、ある教え子と会った。僕と変わらずこんなものをぶら下げて、得意げな顔で話してくれた。どれほどの敵を追い詰め、燃やし、爆ぜ、勲章を得た。幸せだ、と。僕の受けた衝撃をきみは理解できるだろうか？　きっと理解できないだろう。理解してくれと願う気はない。僕ときみは悲しいほどに違う存在なんだ。それでも、僕はここできみ達の指揮を執っている。僕は一度たりとも、幸せだと思ったことはない」

提督の言葉の端々に嫌悪や憎悪のような感情がにじみ出ていることに気付いた。金剛は言葉を選びながら慎重に尋ねる。

「あなたは軍人が……」

「嫌いだよ。ならば、何故、と訊きたいことは分かっている。僕達は人間同士の先の戦いで負け、目覚めるかと思えば、今度はよく分からない存在相手に戦うようになった。過去の産物のような、泡沫のような存在相手に勝った負けたと繰り返している。終わらない戦闘だろうと、僕が人間ならばその果てにあるのはたった一つの現象さ」

「ここだったら、誰にも迷惑をかけることなく死ねる。金剛、僕はね、死ぬために戦っているんだ。僕の死は先の彼等と同じ死ではない、もっと人間的な死だ。大義名分もない、哀れな死だよ」

提督の言葉を受け、金剛の手が止まった。提督と金剛達では目的は違う。金剛は生きるために戦っている。しかし、提督は死ぬために戦っている。金剛は今までのように、軽い調子で言葉を続けられなかった。戦場に立つ金剛達は死と隣合わせである。金剛達が死ぬのならば、全然有り得ることであり、金剛も覚悟している。しかし、提督だけが死ぬとなれば、金

剛は考えを上手くまとめられなかった。呆気ない調子が金剛の口から零れる。
「死ぬ？」
提督は金剛の考えがまとまっていないことなど気にもかけず続ける。
「きっときみ達は生きるために、生き残るために懸命に戦うことを命じられていることだろう。その点を否定しない。否定しないでほしい。もしきみ達が死ぬために戦うというのであれば、僕はきみ達の指揮を執らなかった。僕の死にきみ達を巻き込みたくない。巻き込んでしまえば、僕の死は僕の死ではなくなり、大義名分の死にすり替わってしまう」
「提督がいなくなれば、私達はどうすればいいんでしょうか？」
「僕がいなくなったところで、僕の側にいた大淀やきみが僕のように作戦を取り仕切るだろう。不安かもしれないけど、きみはできるよ。きみはどの艦娘より長い間、僕の秘書艦を務めたんだ。できるよ。そして、いずれまた新しい人間が配属される」
「私が轟沈してもいいのでは？」
「確かに代わりが効く。しかしそれは、すなわち、きみの轟沈を認めたということではない。勝てるのならば、きみ達を一隻失っても勝ちを得る」

「提督はそんなことしません」

金剛は強い調子で否定した。よく知らないのにもかかわらず、胸の奥が熱くなった。提督がその選択を採った時が提督の最期のような気がする。遺書か手記かどこかで、この死は艦娘達の責任をとるための死ではない、といったような言葉を書き連ねることだろう。

提督が何を考えているのかはよく分からない。しかしそれでも、艦娘を一隻失っても勝利を取りに行くような人間ではないことは分かる。金剛は他の艦娘よりも、提督がどのような指揮を執るのか知っている。上の決定だからといって、大淀を前線に立たせても、必ず護衛を忘れない。金剛の他に、大和や武蔵や長門や陸奥という戦艦を所有しているのにもかかわらず、金剛は一度も第一艦隊の旗艦から外されたことはない。後一歩で勝てるところであろうと、艦娘が大破した段階で必ず徹底する。沈まなかったらまた戦えると提督が言っていたような気がする。

提督は死ぬために戦っていると言った。その言葉は、金剛の動揺を引き起こすための嘘かもしれない。あるいは本当に、提督は死ぬ気なのかもしれない。どちらであれ、その中に金剛達の存在はない。今、提督の頭にあるのは、自分が死んでからのことであろう。処務しか

言い渡されていなかった大淀が前線に立つようになったのは、上の決定だけではなく、提督の考えも混じっているのではないだろうか。

金剛はこの機会を逃せば、二度と提督のことが知れなくなってしまうような気配を覚えた。

「提督は、最初から死ぬためにここに？」

提督は蔑むように笑おうとしたが、上手く笑えないように顔を歪める。歪んだ顔の隙間に人懐っこい笑みがあるように見える。短い沈黙の後、提督はそれまでの仏頂面を崩し、柔らかい顔になった。目元に優しい皺が入り、声に苦味が混じる。

「何もずっと死のうと思っていたわけじゃないんだ。ただ最近、どうも生きることに飽いてきた。僕自身、何故だか分からない」

「飽いてきた？」

「そうさ、何故だと思う？」

「私は提督のような人間ではないので、分かりません」

「金剛、そう無下に扱ってはいけないよ。人間だから、ということではない。艦娘だからということではない。きみ達は考え、戦い、生きている。そこに何の違いもないんだ」

同情するような声音に、金剛はほとんど悲鳴に近いような声を上げた。

「違います。私達とあなた達は違います」

金剛達艦娘と提督達人間は違う。同じように扱ってはならない。艦娘達が艦娘と呼ばれるのは、人間達とは違うからである。艦娘達が人間になろうと希ったところで、人間にはなれない。いやおそらく、艤装を外せばなれるかもしれない。しかし、艤装を外しただけでは埋められない溝が、艦娘と人間の間にはある。

その溝とは何なのか、金剛は時々考えることがあったが決して答えを導こうとはしなかった。導いてしまえば、この艦隊で砲撃を放ち、他の艦娘を前に立つことができなくなってしまうような。そんな言いようがない不安があった。金剛が人間であれば、その不安を味わなかったのかと考えると、提督の表情を窺うと分かる。もし金剛が人間であったのならば、同じように不安を感じ、今の提督のように死を思うことだってある。

提督は引き出しから数枚の書類を取り出し、金剛に読ませる。新規戦力を募集している新聞記事だった。人間が艦娘になり、戦地に立つということを歓迎しているような記事だった。金剛は低い声で提督に問う。

「これは？」
「文屋の書いた記事だよ」
「いるんですか？」
「僕の鎮守府にはいない。他の鎮守府にはいるかもしれない。呉や舞鶴や横須賀かそこらにはきっと……」
金剛には人間から艦娘になりたいと思う人間が存在していることが分からなかった。艦娘になったからといって、何か特別なことが許されるわけではない。艤装により失った身体の一部を取り戻そうする人間が存在していたことはあるが、そのどれもが戦力として機能しなかったことを金剛は提督から聞かされている。この記事を書いた記者はそういう都合も知っているかのように、健康的な人間を求めている。そういう人間がわざわざ艦娘になり、戦地に赴く。その意味が、金剛には分からない。それほど他の鎮守府では戦力が足りていないというのであろうか。もし、そういう娘と会った時、金剛はどのように接すれば良いのだろうか。
彼等と戦うのは金剛達の役目であり、そこに限りなく人間である娘の席はない。自らの意

志で艦娘になったところで、その意志を最後まで貫けることはない。必ず意識は目覚め、理性は引き金を引く指を、標準を躊躇わせる。そうして帰還し、処分されてしまう。そうさせないために金剛達艦娘がいるのではないだろうか。

人間には人間の役目があり、艦娘には艦娘の役目がある。その垣根を飛び越えてまでこちら側に来て、その存在が無事に生きられるなど一切保証できない。そんなことが横行してしまえば、一体金剛達が何のために存在しているのか分からなくなってしまう。

「何故、ここまでして……」

提督は記事の一部を指差し、筆記試験や面接があることを金剛に教える。それからこういう言葉を続ける。

「提督の中には、家族がいる人間がいる。この記事は新規戦力を歓迎しているわけではないんだ。彼女等に求められているのは、きみ達と同じように戦場に立つことではない」

「家族ですか」

「そう難儀な顔をしなくてもいい」

提督の左手の薬指には結婚指輪はない。少し前、提督から指輪が貰えると噂されており、

金剛も期待していることがあったが、結局提督は誰にも指輪を手渡さなかった。提督が所帯を持たず、子供もいないのは、ここで働く意味を聞いた今ならばよく分かる。

金剛は昔読んだいくつかの小説を思い出し、乙女らしい質問を提督にする。

「提督が死のうとしているのはよく分かりました。愛する人と死のうという気にはならないんですか？」

提督は新しい煙草に火を灯し、白煙を吐き出した後、恥ずかしそうに答える。

「失敗したんだ」

「失敗？」

「軍人として働く前、教師を辞してしばらく家で過ごしていた時だったよ。自分の教えたことや教え子の将来とかを考えて疲れて、死のうと思った。その時の僕は今みたいに一人で死ぬことを恐ろしく、誰かと死のうと思っていた。その女の人は美しい人で、あるホテルの一室で僕に青酸加里を手渡してくれた。でも、僕達は死ななかった。そうやって死ぬことすら恐ろしく思えたんだ」

「提督は案外怖がりなんですね」

人間らしい提督の一面を見て得意になった金剛は、他の艦娘と接するように優しい声を上げた。提督は何も言わず、新しい煙草に火を点そうとしている。一本の煙草を咥え、提督は、怖がりなんだよと笑った。

金剛の胸に微笑ましいものが去来した時、なんだか急に執務室が狭く感じた。のみならず、提督が随分と若く映る。その時、提督の背後にある窓に、一匹の黄色い蝶が飛んでくるのが見えた。羽の縁が黒い蝶だった。金剛はその蝶を見た時、ほとんど発作的にある出来事を思い出し、提督の顔を見つめる。見つめられた提督は不思議そうに目を細める。

「私達はどこかで会ったことありますか?」

どこで会ったのかまでは思い出せない。それでも、昔のことを話し、笑う提督の顔に金剛は見覚えがあった。そして、あの蝶に蝶以外のことを感じていた提督のことを金剛は知っている。妙な心持ちで機関長の話を聞く提督のことを、微笑ましい気持ちで見ていたことを金剛は知っている。

提督は目を見開き、聞いたことのないような優しい声で答えてくれた。

「随分前に会ったよ。だから、きみを秘書艦に任命したし、今後もそうしてもらう気でい

る」

「随分、変わりましたね」

「僕は人間だからね。変わるさ。でも、きみも変わった。見違えるほど大人になった」

金剛の記憶の内にいた提督はもっと若く、誠実な青年だった。少なくとも、死のうと考えている今の提督には似ても似つかない人間である。その人がどうしてこうなってしまったのか、分からない。金剛が海上にいる間、提督は陸で一体どのような生活を送り、こうなってしまったのであろうか。もしこの再会で、提督の心持ちが変えられるのならば、金剛はそういう言葉を並べられるだろうか。

しかし、そこには提督と金剛の最も埋めがたい人間と艦娘という関係が存在している。金剛はその溝を飛び越えてまで、提督を生かしたいと思えるのだろうか。それほどのことを行うことを、金剛は許されるのだろうか。生きることに飽いている提督に。

「それでも、死のうとされるんですか？」

「それでも？」

「思い出して、再会を喜んで、それでも……。それでもですか」

「だからこそ、だろう」

提督は窓の向こうに目を遣った。そこには一匹の蝶がまだはばたいている。

「きっときみは感じたことないだろうが、この世界はどうしようもない不安で溢れている。その不安一つ一つを点検して、長い言葉を用い自らに説明し、不安が不安ではなくなる。そういうことを繰り返していた。でも、そういうことができなくなった。この生存苦が生存苦ではない、と説明できるほどの頭脳を僕は失ってしまったんだよ」

提督は視線を戻し、金剛を見る。その目は悲しい色をしていた。

「きみは蝶を見た。でも、僕は蝶以外も見ていた。いや、蝶なんて本当は見ていなかったかもしれない……。初夏の思い出を懐かしんでいただけなのかもしれない」

金剛は提督の目を見て、この人は近い内に死ぬだろうなと勘付いた。提督も、金剛に伝わったと思ったらしく、それ以上は何も言わず書類に目を落とした。

金剛はおそらく、沢山、提督と話せることができただろう。もし金剛が艦娘ではなければ、もっと積極的に沢山の言葉を交わし、提督を死から遠ざけようと努めた。しかし、金剛は艦娘である。人間の生と死を直接左右するような存在であってはならない。

「きみがきみで助かったよ……ありがとう。またよろしく」

提督の独り言のような優しい言葉に、金剛は静かにティーカップを傾け、何も聞こえなかったように振る舞った。それでも、胸の痛みはまだ消えそうになかった。《了》

時雨と提督「恋煩い」

秘書艦だった時雨が一線を退いた。

提督は初めて彼女を見た時から、こんな細面で色白な少女も艦娘として艦隊に組み込まれ、戦闘を行うのか不安だった。時雨は提督の不安を見透かしたように微笑し、大丈夫、と言ってくれたことを、提督は今でも鮮明に思い出せる。

就任間もない提督の元には十分な戦力がなく、時雨を第一艦隊の旗艦にし、秘書艦にし、数多の敵と戦うように命じた。そうして、時雨はいつの間にか、提督の不安を打ち消すようにいくつもの武勲を手に入れた。大丈夫だったでしょ？　という言葉と共に笑顔で執務室に報告に来る。

そんな時雨の体調が優れず、秘書艦を辞し、旗艦を扶桑に譲り、港を去ろうとという噂が艦娘達の口から立ち込めるようになった。嘘か誠か分からない噂だったが、最近の時雨が第一線で活躍していないことから、噂はいつの間にか信憑性を帯びるようになり、母港を駆け巡り、ついには提督の耳にも届くようになった。

提督は馬鹿馬鹿しいと呆れ返ることはできなかった。噂の出所を探ると扶桑と山城だった。提督は二人を呼び、時雨の口からそのような言葉が出たのか、と尋ねたが二人は曖昧な返事

をするだけで肯定も否定もしない。

提督は沈黙を決め込み、時雨の口から語れるのを待つことにした。しかし胸中が穏やかではないことは、提督自身も、そして他の艦娘にも明らかなことであった。提督はまず自身の指揮を後悔した。次に初めて会ったあの時、時雨を前線に立たせなければ、こんなことにはならなかったのではないかと悔やんだ。それらの後悔が涙となって提督の瞳に浮かびそうになったが、提督は提督としての責務を果たすため一切を堪えた。

時雨からの告白はまだない。提督は他の鎮守府に連絡を入れたり、過去の情報を探り、艦娘の体調が優れなかった場合、という報告があるのかどうか探す。どこにもそのような情報はなく、入渠で完全に元に戻るばかりだ。

提督自身、もしかすれば時雨自身も、入渠すれば元に戻るだろうと思っていたことだろう。けれども時雨の体調はいつまで経っても元に戻らず、段々と初めて会った時のように痩せ衰えているようにすら見える。

提督に残された選択肢は、ほとんど一つしかないように思われた。すなわち、時雨の解体である。戦力にならない艦娘を所持しておくわけにはいかないだろう。もし時雨のことを放

っておけば、他の艦娘の士気にも影響するだろうし、今後時雨のように体調を崩す艦娘が出てきた時に対応できる。

ならば、時雨を解体するしかないのであろうか。提督は時雨を解体したくない。今現在の戦力にならない時雨よりも、就任当初から、提督を支えてくれた時雨の存在が大きく関わっている。提督のみならず、時雨の解体が他の艦娘にどれほどの影響を与えるかということも考えなければならない。時雨という艦娘は他にも存在している。しかし、提督の知っている時雨は彼女しかいない。提督は彼女を失いたくはない。

性能が違うからということでもなければ、他の艦娘との関係に違和感が生じるからという軍人的な考えよりも、人間的な部分から芽生えた思いであった。

時雨は艦娘であり、人間ではない。量産され、戦うために作られた存在である。提督達の命令に従い、戦果を得る存在である。言ってしまえば、時雨は兵器である。限りなく人間に近い兵器なのである。

提督の感情が理解できても、共感まではできず、同情もできないのだ。提督がこう思っていても、時雨には分からないのだ。上に立つ者としての責務を果たすのを、気遣いを、時雨

が勘違いしていることだって十二分に有り得る。

機械である彼女達はメンテナンスを定期的に行えば、体調を崩すなどという人間的なことは起きないのではないだろうか。本来ならば、起きないようになっていることが、時雨の内で起きてしまっているのではないだろうか。

提督は艦娘について詳しいことは知らない。提督が知らないとなれば、その下にいる時雨達艦娘も詳しくは知っていないことだろう。時雨に人間的な療養を与えた時、どうなるのであろうか。その時雨は果たして、提督の記憶の内に存在している時雨と同じ時雨なのだろうか。

何故、時雨だけなのだろうか。時雨のことを考えてみるが全然分からない。けれども、今ここで分からないからと解体してしまうのは愚策のような気がしてならない。これが時雨個人の、時雨という艦にのみ生じるものなのか、あるいは艦娘全てに当てはまるものなのか明らかにしなければならない。

ある夜の波が穏やかな日、時雨が一人で執務室に訪れた。

「いつも大変だね」

提督は書類を確認する手を止め、時雨を見る。労うように微笑する時雨だったが、黒髪は幾分か艶を失ったようだ。髪の向こうに揺れる青い瞳の奥に、何かを訴えかけるようなものが色濃く映っている。

「仕事なのだから仕方ない」

「そっか……」

部屋に沈黙が落ち、提督はぬるくなった珈琲に口を付ける。時雨に気遣われ、提督は気の利いた返事一つできないことを少し悔やんだ。提督の仕事よりも、時雨の方が大変なのである。

「時雨は大丈夫か？」

「大丈夫じゃないよ。調子が、良くないんだ」

時雨の告白はそんな言葉から始まった。時雨の言葉の一部には、提督はもう知っているかもしれないけど、という諦めが流れているようだった。

提督は驚くことはなく、むしろ悲しいほど現実を突き付けられ、言葉を一瞬詰まらせた。それでも時雨に悟られないように、毅然とした態度で応じる。

「先の検診や定期メンテナンスでは異常は見られなかったが？」
「うん、僕もそう思っていたんだけどね……どうも最近おかしんだよ」
「おかしい？」
「身体は別にどうってことないんだけど、心の部分がね」
「ドックを一つ空ける」
「意味ないよ」
　時雨は提督の事務的な優しさを切り捨てるように言い切った。提督は次の言葉を飲み込んだ。時雨は次の言葉を待っているように暗い瞳を提督に向けたまま黙っている。提督は微かに震える唇を引き締めた。
「お前は第一艦隊の旗艦であり、秘書艦でもある。そのお前が療養であろうと母港を離れるということは、お前が務めていたことを代わりに行う者が必要となってくることだ。もし自らの役目の代わりに誰か希望を立てるのならば可能な限り考慮する。もし希望がないのならば、私の方で決めさせてもらう」
「旗艦は扶桑にお願いしたいかな……」

「秘書艦は？」

「秘書艦は最上だときっと色々助けてくれるよ。元気だからね」

提督は時雨の療養による戦線離脱を認めたくなかった。しかし、このまま時雨を母港に繋ぎ止めたところで状態が良くなるとは思えない。かといって、悪化するとも思えない。提督もそして時雨も、何も変わらない現状を受け止め普段と変わらない生活を送れるほど強くなかった。どこかが悪いと分かっているのだが、どうすれば良くなるのか分からない時雨の気持ちを、提督が汲み取ることなど不可能だった。提督にできることといえば、精々時雨の苦痛を和らげるために療養による離脱を認めることぐらいだろう。

「どの程度離れるのか予想はできそうか？」

「……ごめん」

「誰が悪いという話ではない。私も、そしてお前自身もまだ分かっていないことの方が多いだろう。どうであれ手に入れた療養期間だ、自分のために使うのも悪くないだろう」

「難しいね」

「すぐに慣れる」

提督は時雨を励まそうと笑ったが、時雨の表情は固いままだった。もし提督が今の座を辞し、誰かに代わるということが起きれば、時雨と同じような顔をするだろう。自らの代わりとしてこの椅子に座る者がちゃんと仕事をするだろうかということが心配なのではない、不安なのではない。

ならば何故、こういう固い表情のままなのかと問われると、離れるということ自体が不安なのであり恐ろしくあり、本当に戻ってこられるだろうかという思いに駆られるからである。そして、戻ってきた時、自分達の居場所は残っているであろうか。

提督の場合、残っている可能性は限りなく高い。代理の者は元の席に戻り、提督がその空いた席に座るだけである。ならば、時雨はどうなのであろうか。時雨の場合、提督とは違う問題がある。旗艦も秘書艦も決めるのは提督にあり、提督が時雨の居ない間に扶桑や最上の勤めを好めばそのまま引き続きということも有り得る。

時雨の場合、空白の時間を取り戻すために療養前よりもずっと動かなければならないだろう。となれば、またどこかを患い、療養ということも考えられる。

艦娘ならば、人間と違い、そういうことも起きないであろうと思っていたのだが考えを改

めないといけない。

時雨のことが上層部の耳に届けば、十分な戦力が整っているこの鎮守府では、解体してしまえのも良いのではないか、という主旨の文書が送られてくることも有り得ないことではないだろう。

戦力に余裕があるから今後の経過を見守るとならないのは、時雨が艦娘であり兵器だからであるからだろう。何かあった時、提督達人間では制御できないという絶対的不安があるのだ。

その不安を解消するために、艤装を用意するために艦娘達の情報を集め、入渠時に変わったところがないかを検査し、一ヶ月に一度のメンテナンスを設け、何か不都合があった際には、艦娘の記憶や五感や肉体は作り変えられる。

けれどもそれらの作り変えは保険であり、万が一の際に用いられる最終手段である。本来存在するはずのない記憶や記録を外部から送り込まれ、艦娘がどうなるかなど、完璧にシュミレーションできない。現状では提督の指揮の元、彼等の殲滅をしているが、作り変えられたことによって別の命令に従う可能性も十二分に有り得ることなのだ。

時雨の療養による離脱は上層部にとっても提督にとっても不測の事態であり、どう対処するか慎重にならなければならない。もし提督が独断で正式に時雨の療養による離脱を認めてしまえば、その書類は上へと届けられ、提督はすぐさま、何故そのような判断を下したのかと問われる。

艦娘は兵器であり機械なのだから不調を訴えたのであれば、すぐに処分して別の兵器に補わさせればいいだろう、兵器に情を移す必要はないと言われるだろう。

別の艦娘に補わせた場合、時雨が戻ってきた時の居場所がなくなってしまう。遅れを取り戻し、また最前線に立つのにどれだけの時間が必要になるだろうか。時雨はそれほどまでして、この鎮守府に戻ってきたいのだろうか。提督は時雨にそんなことを訊けなかった。それは兵器として戦う時雨には理解できない質問の一つである。それを今、口にしてしまえば、時雨を否定しまうことになる。しかし時雨はそんな質問に答えられないほど弱いだろうか。提督には時雨という者が何を考え、思い、どういうふうに動くのかよく分からなかった。

分からなくても、提督が行わなければならないことは存在する。書類を作成せずに時雨を療養させなければならない。となれば、他の目を誤魔化すために、この時雨とは違う、別の

時雨が必要になる。演習で時雨を使っていれば、あの鎮守府には時雨は存在していると印象付けられる。本当の時雨がいないというところまでは気付かれないことだろう。しかし、その保険は長くは効かないだろう。

提督一人で事を運ぶにはあまりに危険過ぎる。提督一人の判断により、療養中の時雨にまで危険に晒される。

「今、この場でお前の療養による離脱を認め、外に出すことはできない。明朝にまた来てくれ。必要なことはこちらでやっておく」

「ありがとう」

執務室を去ろうとする時雨の背中に提督は優しい言葉をかける。

「たとえお前がどれほどここを離れようとも、お前は時雨である限りは私は提督としての務めを果たす気でいる」

時雨が出ていき、提督はすぐに艦娘達のメンテナンス等々を主な仕事としている部署に内線をかけ、まだ仕事をしているであろう同期の男を呼び出し、気分転換に車でも出そうと言った。男は少しの沈黙の後、了承した。提督は幾つかの書類をまとめ、窓の向こうに目を遣

った時、外灯に照らされた赤煉瓦に一人の人間の影が見えた。
提督は車を走らせ、丘を下る。
「こんな時間から済まない」
「気分転換は大事だ」
男は助手席に腰掛ける。
赤煉瓦周辺を離れ、湾岸を走らせる。穏やかな波の中をエンジン音が響く。信号が赤になり、提督はブレーキを踏む。
二人は終始無言であった。男は熱い珈琲に口をつけ、太い両眉を微かに寄せる。
「俺も暇ではない」
その言葉を受け、提督は書類を男に手渡し、本題を切り出した。
「時雨が療養で鎮守府を離れる」
「は？」
同期は素っ頓狂な声を上げたが、提督は構わず落ち着いた調子で続ける。信号が青に変わり、提督はゆるやかにアクセルを踏み込み、先程より速度を少し落とし鎮守府から離れる。

「時雨だけがそうなのか、艦娘全体に起こり得ることなのか分からない。先のメンテナンスで心身共に異常がないだろう？」
男に手渡した書類には先のメンテナンスの結果やここ最近の時雨の戦績などが記載されている。
「度重なる戦闘による精神的なものか？」
「仮に戦闘によるストレスが原因だとして、それほどの戦績を維持できるのか？」
「本人に自覚症状は？」
「胸が苦しくなるということらしいが……」
提督と男の脳内には結核の二文字が浮かんだが、先のメンテナンスや明石や大淀の日々の報告書に異常は見られない。
「異常なし、か」
「過去、どの鎮守府にも療養により鎮守府を離れたという報告はない」
「お前達の私事都合による外出はどうなる？」
提督は行ったことはないが、他の鎮守府では提督が暇の時に私事都合として艦娘とどこか

へ出掛けるということがあるらしい。
　男から書類を返され、提督は答える。
「それも長期に渡るようなものはない。平均して三日だ。それ以上は怪しまれる」
「三日で治る可能性は？」
「断定はできない。そもそも……」
「治らない話はやめてくれ」
「済まない」
　男は煙草に火を灯し、薄い煙を吐き出す。男の左手の薬指には指輪がある。提督は一瞬、この男に協力を扇いでもいいのだろうかと迷った。ここから先は何が起こるか予測できず、提督や男が制服を脱ぐことも有り得るかもしれない。そうなった時、男の妻はどうなる。そして、この男自体もどうするつもりなのか。全く同じことを提督自身にもいえたが、提督は独り身であるため、男ほど心配することはないだろう。
　男は提督の心情を察するかのように慰めの言葉を投げかけてくる。
「別にお前が悪いわけじゃない」

提督は男の言葉を受け、自嘲するように笑う。提督は提督として、艦娘の戦場に送るために練度を高め、陣形を変更し、戦地に送り出している。配属間もない新しい艦娘が精神に不調を来すのであればまだ分かるのだが、最古参の時雨がとなると提督自身の扱い方が悪かったのでがないか、と考えてしまう。

「今まで起こり得なかったことだ」

「それでも艦娘は艦娘であり、俺達人間とは違う。いくらメンテナンスやバックアップが万全であったとしても、俺達の予想を裏切ることがあってもおかしなことじゃない」

「だが……」

「艦娘という限りなく人間に近いが全く人間ではない兵器を管理下において、彼女等の全てをコントロールすることはできない。俺達は人間なんだぞ」

「分かっている」

「分かっているのなら良い。それで、どうする気だ?」

「外部に情報が漏れない療養先を知っているか?」

「一つ知っている」

「どこだ？」
「俺の家だよ」
男の提案に、提督は静かに血の気が引いていくのを実感した。自らの家に艦娘がいるなど気が気でない。
「細君にはどう説明する気だ？」
「俺の愛している口が固い女だぜ？　看護婦もしていた。時雨の身に何かあった時にすぐに俺に知らせられ、そうしなくても説明すればお前に連絡が行く。悪い所ではないと思うが？」
「そういうことを言っているのではない」
提督は低い声で男の提案を一蹴しようとしたが、他にどこかあるのかと自問すると難しいのも事実だった。数日ならば提督も幾つも候補を上げられる。しかし、今回の場合はどれほど日数が必要なのか分からない。長期的になれば、提督を飛び越えて上層部に連絡が入ることは考えられないことではない。
男の提案を受け入れた方が時雨も安全であろう。しかしそうなった時、細君はどうなるの

だろうか。細君だけではない、男の生活は、彼等の夫婦生活はどうなるのであろうか。
「お前の生活はどうなる？」
「泊まり込みになることは珍しいことじゃない。妻も妻で話し相手がいた方が嬉しいだろう」
「艦娘だ」
提案を拒もうとする提督の耳に、男の厳しい声が飛んできた。
「艦娘である前に一人の患者だ。療養が必要な患者だ。また第一線に戻すんだろう？」
「それほど先のことはまだ考えていない」
「それでも、時雨がまた他の艦娘と一緒に戦いに身を投じることは考えているんだろう？」
「それが時雨の役目であるのだから仕方あるまい」
「戦場から遠い内陸の療養先だと戦場に戻れない可能性がある」
「しかし……」
「赤だぞ」
男に言われ、提督はブレーキを踏む。

提督の胸には男の言葉が木霊していた。艦娘であると思っていた時雨は、今や療養が必要な患者となってしまった。

「患者、か。私は、……私がそうさせてしまったのだろうか？　本来ならそんなことにならないはずの艦娘を、そうさせてしまったのではないだろうか？」

「混同するなよ」

「今こうして考えながら、配属当初のことを思い返すと、心のどこかでこうなることを予期していたんじゃないかと思うんだ。あの時雨が他の艦娘以上の活躍をして何も起きないはずがない……」

「そう思うのならば、お前が時雨にできることをやるしかない。俺ではできないことだ。お前は俺達よりずっと彼女達と接し、言葉を交わし、命令に従わせ、戦地に赴かせ、喜びを共にすることもあれば、悲しみを共にすることだってある。だから、こういうことも起きても何一つ不思議じゃない。むしろ、今までどうして明るみに出なかったのか不思議で仕方ない」

「お前は艦娘をどう思っている？」

「難しい質問だ」
「答えてくれ」
「俺も同じ質問をするが、答えても構わないか？」
「……構わない」
男はまだ吸える煙草の火を消し、答える。
「俺は艦娘と人間を重ねて見ることがある。でもそれは、艦娘が傷付いた時だけだ。彼女達が傷付いた時だけ、俺は人間の患者と同じように思い、扱い、対処する」
「お前はずるいな」
提督の唇の端から無意識に漏れ出た言葉には憧れと尊敬があった。男は時雨達を人間と同じように考えても許される。男が艦娘と関わる時、医者が患者と接する時と同じなのだから。兵器としての面は柔らかくなり、負傷した存在としてまとめられる。
しかし提督は違う。兵器として艦娘を扱い、彼女達の四肢に提督と同じような血が流れているとは考えないようにしている。もし提督達と同じ血が流れていると考えてしまえば、提督は堪えられなくなりすぐに辞職するだろう。

男が問う。

「お前は艦娘をどう思っている？」

提督はそのことを深く考えないようにしていた。それを考えてしまえば、自らの指揮が鈍るような気がしてならなかった。どうとも思っていないと答えようとした矢先、時雨の姿が脳裏をよぎる。

提督が危険な橋を渡っていることを男も知っている。どうとも思っていないのならば、非情に徹し時雨の解体を選べばいい。しかし提督は非情に徹することができず、時雨を解体させない方向に歩んでいる。

そこまでしているのにも拘らず、提督は艦娘をどうとも思っていないのであろうか。提督自身、艦娘という存在に、艦娘という存在の精神に、人間の心模様を重ねているのではないだろうか。重ね合わせていることを自覚しないために、艦娘をどう思っているのか考えないようにしていたのではないだろうか。考えてしまえば、そう思っている自らを見付けてしまうからゆえに。

もう誤魔化しきれないところまで来ている。提督が隠そうとしても、察する艦娘がいずれ

現れることだろう。そうなった時、艦娘は提督の思いをどう考えるのであろうか。提督自身も、艦娘に向けたこの思いをどう考えるのであろうか。艦娘に向けている思いは山のようにある。

「失いたくないな……」

最も強い思いが、提督の口から滑り落ちた。男は納得したように、溜め息のような息を零した。

「なら、失わないようにやるしかない」

「しかし、この思いは……」

「今は深く考えない方が身のためだ」

「今考えないでいつ考えられる？」

「明日の朝に考えておいてくれ」

男はそう言って、新しい煙草を取り出し、空になった箱を握りつぶす。提督は何も言わず、ハンドルを回し、今まで走ってきた道を戻る。

提督は艦娘を失いたくないという思いが、どういう感情から芽吹いたのか考えようとして

いた。ここを考えないと、大きな勘違いに繋がってしまいそうだった。すなわち、艦娘だから失いたくないのか、提督として指揮を執っているがために艦娘を失いたくないのか、艦娘と人間を時々重ねて合わせてしまっているがために失いたくないのか、あるいは時雨だからこそ失いたくないのか。

信用や信頼から生じたものなのか、あるいはもっと別のところから生じたものなのか。もっと別のところから生じたのであれば、艦娘にそういう感情を懐いている自らを律しなければならない。兵器にそのような感情を懐き、失いたくないと思うのは不可欠なことだ。失いたくないという思いが強くなってしまい、本来採らなくていい選択を採ってしまう。

提督は全ての思いを押し殺し、アクセルを強く踏む。男の驚いた声が耳朶を打つ。

赤煉瓦に戻り、男は助手席を降りる。

「これを」

提督は胸元から一枚の書類を取り出し、男に渡す。時新しい時雨と新しい主砲や魚雷を搭載させ演習に使うために用意してほしいという文書だった。

「中身は？」

「カモフラージュだ」
「拒否権は？」
「命令に変更してもいい」
「上手くやる」
「期待している。全てが終われば、細君と共に礼の一つや二つはする」
「期待しているぜ」

※

艤装を外し、何泊か分の荷物を持つ時雨は一件の家の前で立ち止まっていた。療養による離脱と言うからには、病院に行き、医者や看護婦に囲まれ、何をしたらいいのか分からない入院生活を送るということを想像していた。しかし提督と付き添いの男に案内されたのは、鎮守府から車を走らせ、駅を越えた所にある一軒家だった。鎮守府に帰ろうと思えば、簡単に帰れる。

77 時雨と提督「恋煩い」

表札を確認すると、付き添いの男と同じ名前が書いてある。呼び鈴を鳴らすと少しの沈黙の後、ドアが開く。

一人の女が出てきた。細い女であったが、腹部だけが大きく丸みを帯びている。左手の薬指には、小さな指輪があった。

時雨はその指輪を見て、提督から指輪が貰えるという噂が鎮守府に流れたことを思い出した。先々月の定期メンテナンスの時にそのような話題が戦艦あたりから出て、先月の定期メンテナンスの頃には時雨を含めた全員の耳に入っていた。

時雨は他の艦娘のように、提督から貰える指輪に興味はなかった。その時には時雨はもう、提督から沢山の武勲を受け取っていたからである。しかし、提督が誰かにその指輪を渡すということは気になった。秘書艦であった時雨はその立場上、執務室で提督と共に居ることが多かったが、提督は一度も指輪のことを口にしなかった。もしかすれば、時雨の知らない間に既に渡したのかもしれないと思い、提督に尋ねた。すると提督はこう答えた。

「提督から指輪が貰えるらしいね」

「指輪？」

「皆浮き足立っているよ」

「誰であろうと特別視はしない、指輪一つでそのような噂が立つのであれば私にも考えがある」

その言葉の直後、提督は全艦娘に誰にも指輪を渡さないと通達を送った。時雨はそんな提督の姿を見て、心が安まるのを感じた。一方で、もし時雨が提督に指輪のことを伝えなければ、提督は秘密裏に誰かに指輪を渡したのではないか、という拭えない不安も存在していた。薄々であったが、提督が指輪を渡す候補に時雨自身は入れないと察していた。きっと指輪を渡すのは大和や長門や陸奥といった美しい艦娘にと思っている。時雨と提督では釣り合わない。時雨があまりに何も持ち合わせていないのである。彼女等のように美しくなければ、明石や大淀達のように提督の考えていることを補えるほどの頭脳もない。

「時雨、ちゃん？」

「あっ、はい、よろしくお願いします」

女の戸惑う声に我に返り、時雨は赤みを帯びた頬を隠すように頭を下げた。女は微笑して、時雨を招き入れる。

夫婦の家には幾つかの部屋があったが、時雨達が暮らしている家よりかは小さいものだった。男の部屋はあったが、女の部屋はなかった。

居間で待っていると、女は台所で何か準備をしながら時雨に柔らかい調子で言葉をかけてくれる。気遣われているような気がして、時雨は自然と女の調子に合わせて答えることにした。

「提督さんは何て？」

「提督は別に何も……ただ、ゆっくりしていけばいいって」

「そっか。主人は何て？」

「細君の良き話し相手になってほしい、って」

「そんなこと言うんだ……困った方ね？」

「そうですね」

「あっ、何か飲む？」

「お茶を」

応対しながら、時雨はこれからどうするのであろうかと考えていた。女が看護婦であるこ

とは男からも提督からも教えてもらっている。ということはここで時雨の治療に専念する。提督や男ならばそういう方法も十分に考えられる。しかし、時雨は艦娘であり、普通の人間と同じような治療が通じるとは思えない。艦娘には艦娘の治療方法があり、鎮守府はその設備が整っている。

そこに居た方が早く戦場に復帰できるのではないだろうか。しかし、時雨の苦しみは鎮守府の専門的な治療ではどうにもならなかった。だからといって艦娘のことを何も知らないであろうこの女と共に過ごし、苦しみは取り除かれるというのであろうか。

時雨は女のことを知らず、女も時雨のことも知らない。信用や信頼の積み重ねから始まるとなれば、時雨が思っているよりもずっと沢山の時間がかかってしまう。

お茶を持って来た女に、時雨は姿勢を崩さず固い声で伝える。

「僕は一刻でも早く、提督の元に帰りたいです」

「そうね。その心が大事よ。病は気からっていうからね」

「その、どうやって治す気なんですか？」

「ん？　まだ分からないことだらけだからこれから考えるところ」

女の言葉に時雨は語気を強めた。女は時雨の調子に怯えたように視線を泳がせる。
「提督や旦那さんから何か聞いていないんですか？」
「そんなに怒らないで……。聞いたことは聞いたのよ。でも、余計なことは教えたくないって言われて」
「どうして？」
「向こうには向こうの考えがあるんじゃない？」
「提督の？」
提督には何か考えがあり時雨を女の元に預けたということなのだろうか。提督は時雨が何故、調子が良くないのか勘付いているのであろうか。もし勘付いているのであれば、何故、話してくれなかったのだろうか。時雨は提督の考えていることを考えないようにしていた。
時雨は深海棲艦と戦うためだけに存在している兵器である。余計なことを考えてしまっては、戦闘時に感覚が鈍ってしまう。そうなってしまえば、時雨が存在する意味がない。人間を守り、失わないために海上を進み、深海棲艦を討つ。そのために時雨はいる。悲劇を繰り返さないために、時雨は再び戦場を駆け巡る。

けれども今は、原因不明の病により戦線から離れている。女の治療を拒み、このまま鎮守府に戻ることは可能だろう。女よりも鎮守府の方が時雨を治療できるのだから、そうした方がいい。は、その選択を採ってしまえば、提督や男を裏切ってしまう。しばらくの間、提督達のためにもここに居なければならなかった。

女がそれから時雨の調子が悪いのをいつ頃からなのか、悪いところはどこなのかということを尋ねる。時雨はどの質問にも正直に答えた。自覚症状が出たのは先々月の定期メンテナンスを終えた頃だった。胸のあたりが苦しくなる。戦闘に差し支えがないが、時折、深海棲艦に砲撃が当たらなくなった、と。

深海棲艦が艦娘との戦闘の間に学び、独自の発展を遂げ、砲撃を当てにくくなったと考えることも可能だが、時雨はそうとは考えられなかった。提督の元に就くようになってから沢山の深海棲艦を屠ってきた時雨の感覚が、深海棲艦が強くなったと考えるのではなく、時雨の精度が落ちたと考えているのである。

時雨達艦娘の戦績は絶えず数値化され、メンテナンスの際や今後の戦闘の参考にされる。提督の秘書艦として、第一艦隊の旗艦として、提督の側に居るためにはこれ以上のミスは許

されない。先月のメンテナンスでは僅かに普段の数値を下回っただけであり、特別な異常ということはなかった。提督も異常なしと判断しているのか何も言わなかった。しかしそれが二度、三度と続けば、提督も異常なことが起きていると気付く。となれば、時雨が秘書艦を代わりを命じられたり、第一艦隊旗艦の交代を言い渡されることは有り得る。そう言われるより早く、時雨は自ら申し出たのである。提案にどう思われているのか分からない。辛い選択だった。それでも、提督から秘書艦や第一艦隊の旗艦交代を伝えられるよりか幾分も楽だった。提督の側を離れたくなかった。しかし、これ以上、ミスが続けば提督に迷惑がかかってしまう。時雨は人間のようにミスが許される存在ではない。艦娘として果たさなければならないことがあるのだ。

時雨の近況を聞いた女は、同情するかのように呟く。

「大変ねぇ……」

「仕方ありません」

「私、その、時雨ちゃんとか艦娘っていうのをよく知らないんだけど、私達とは違うのよね？」

「違います」

「どこが違うの？」

女は時雨を上から下まで見て、そういう問いを投げてきた。時雨は驚いたように女を見たが、女の問いが純粋な疑問から生じていることはその丸い目が語っている。彼女は艦娘という存在について何も聞かされていないのだろう。

時雨と女は違う。女のように左手の薬指に指輪をはめることもなければ、誰かと生活を共にすることもなく、子供を産むための機能もない。そんなものは艦娘には必要ないからである。しかし、ならば、何故、この肉体の外見は女と何一つ変わらないのであろうか。この肉体が女と変わらないのにも拘らず、女として必要な機能は何もない。それでも、この胸に流れ、芽吹き、広がる感情は女の胸と変わらないだろう。

「……違うんだよ」

女に抵抗するように呟いた。女は時雨を一瞥して口を閉ざした。時雨は自らの声の底が涙で濡れそうになっていることに気付き、驚いた。

この肉体と精神が完全に機械ならば、どれほど楽になれただろうか。異常が起きても、メ

ンテナンスや部品交換で元に戻れたらどれだけ良いだろうか。時雨達の肉体は人間を模して作られているため、一度壊れてしまえば元に戻らない部分がある。精神や心と呼ばれる部分だ。

時雨はかつて、精神や心に異常を来し、元に戻れなくなった者を何度か見たことがある。この胸の苦しみが続けば、時雨もいずれそうなってしまうのであろうか。そうならないために、女の元を訪れたのだが、どうなるのだろうか。

時雨は今の自分の状態がどうなっているのか分からない。異常があるのが分かるが、その異常がどういう異常なのかが分からなかった。提督はどれほどのことを知り、女の元に時雨を預けたのだろうか。

「私は艦娘のこととか時雨ちゃんのこととか、もっといえば主人のこととか提督さんのことかもよく分からないの。だから、皆、患者として、患者という言葉が気に入らないならクライアントって言い換えることもできるけれど、兎に角、ここに来た以上は時雨ちゃんも一人の患者」

「分かっています」

「だから艦娘だからどうとかいうことは通用しないから。あなた達は確かに凄いわ。あの深海棲艦と戦える唯一の存在なんだから。でもだからといって、特別なことをするわけではないの。だって、できないし。艦娘のための特別な何か、なんて私達の家には何もないの。じゃ、人間のための特別な何かがあるのかって思うかもしれないけど、それもないのよ。ここは私とあの人のお家だから。患者なんて言ったけど、そういうふうに対応するのも難しいかもしれないわね」

「じゃ、どうして僕はあなたの家に居るんですか?」

「あの人が時雨ちゃんをここにって頼んだから」

「それだけですか?」

「それだけよ。他に何かあるとしたら、そうね、提督さんにも一緒にお願いされたから?いや、別にあの人や提督さんにお願いされなくても、時雨ちゃんが困っていたら助けるわよ」

「どうしてですか?」

「子供だから」

「子供じゃないです」
「子供は皆そう言うわ」
時雨は微かに怒りを露にしたが、女の思惑通りだったらしく、安らぐように柔らかい調子を返された。時雨は慣れない対応に戸惑い、言葉を返せなくなった。女は時雨が初めて接するような女であった。どの艦娘も持ち合わせていない不思議な感覚を、女は持っている。
女は治療や患者という言葉を使っているが、そのどこにも治療の臭いを感じさせなかった。時雨がどこかを患っているから何かをするということはなければ、時雨がどこを患っているのか調べるということもない。ただ同じ屋根の下で居るだけである。女と時雨が生活を共にすることになった、という方が正しいと思わせるほどであった。
そうして、女との奇妙な共同生活が始まった。生活の中心は女だった。料理を作るのも、洗濯をするのも、掃除をするのも女だった。女は新しい命が宿っているのを気遣わせないように動く。時雨が何かしようとすると、
「時雨ちゃんは座って待っていたらいいよ」
と言われた。それでも、と時雨は意欲を見せると女はわざとらしく笑い、何かを頼む。台

所に立つこともあれば、掃除を手伝うこともあり、洗濯を手伝うこともある。
外の空気を吸いたいと言えば、外に出られるし、女と共に買い物に行くことだってある。
そうして空いた時に、居間で女と一息つく。小さな居間だったため、向かい合うことが多かった。女は長門や大和のように美しい人間ではなかった。だからといって可愛いわけではない。愛嬌のある妻だった。
女が時雨の調子を尋ねることがなければ、鎮守府で何があったのを尋ねることもない。
時雨が訊くと女は答えてくれる。
「子供が生まれるんですよね？」
「まだ先だけどね」
「あの人との子供なんですよね？」
「そうなるね」
「あの人と結婚しているんですよね？」
「意外？」
「どうして結婚したんですか？」

「知りたいの？」

女は時雨の真意を確かめるように訊く。時雨が頷くと、女はどこか昔を懐かしむように遠い目をする。

「あの人はね、人じゃ生活できないの。一人で生活するような人じゃなかったの。何かあれば使いの者に頼めばいいじゃないかって人なの。そういう生まれだからね。あの人は自分の好きなことを好きなようにすることを許された人だった。だからあなた達を特別視しなかったし、何より患者ということを考えることができた。でも、私、あの人のそんなところが好きになれなかったのよね」

「好きになれなかった？」

「ムカついたって言っても間違いないかも」

「あの……」

「だって、あの人、当たり前のように仕事場に寝泊まりしているのよ？　好きで寝泊まりしているから気にしなくていいって言われて、もう怒っちゃったわ。患者のことを考える前に自分のことを考えてくださいって。そしたらあの人、私をぼうっと見てるのよ。初めて怒ら

れたそうよ。それから私の仕事の一つにあの人をお守りが増えたの。分かる？　年上の男の人をお守り。何言っているんだ、って思うでしょ。私も思うわ。でも実際、お守りなのよ。仕事場に寝泊まりしない、家に帰る、ご飯を食べる、ちゃんと寝る……。気付いたら、あの人と結婚するようになったし、子供まで授かっちゃった」

女の思い出話を聞いて、時雨は自然とこういう確認を口にした。

「嫌い？」

「ん？」

「え、いや、何だかそんなふうに思えて……」

「好きよ」

照れ笑いをする女に、時雨は首を傾げた。時雨にはそこまで言う人間のことを、何故好きでいられるのだろうか。女と男の間には、時雨には感じ取ることのできないものがあるような気がする。例えばそれは、提督と艦娘との間にあるような忠誠心のようなものなのかもしれない。時雨達艦娘は、提督の命令に従うようになっている。そういうふうになっているのだ。深海棲艦を討つという目的のために存在しており、その目的を達成するために。

と考えると、女と男の話は違うように思える。何かの目的のために、何かの目的を達成するために共に生きることを選んだわけではない。ならば一体何が、女と男を巡り合わし、共に暮らすというところまで至らせたのであろうか。女の言った、好きという感情が働いているように思える。そこが、提督と艦娘、男と女を明確に分けている部分とすら思える。

そう思った時、時雨が自身の胸の痛みが増したことに気付いた。この苦しみは、その関係性で揺れ動いているからこそ生じているのではないだろうか。

すなわち時雨は今、艦娘として、提督に懐いてはいけない感情を懐いているのではないだろうか。本能という部分で、心を締め付けてしまっているのでないだろうか。だからこそ、胸が悲鳴を上げているのではないだろうか。時雨は、提督とどういう関係になりたいのであろうか。女と男のような、好きで結ばれる関係になりたいのではないだろうか。

しかしそうなった時、時雨と提督、艦娘と提督という関係は維持されるのだろうか。提督が維持を試みようとしても、時雨はその状況を認められるだろうか。そんなこと、時雨には分からなかった。時雨は艦娘であり、提督は人間であり、互いが好きで結ばれる関係など存在しない。

胸の痛みが強くなり、時雨が顔を歪め、女に訊く。

「僕は、提督を好きになってはいけない……？」

「いいよ。誰かを好きになることは自由だよ。いいよ、存分に、提督さんに愛しているって言って」

女は時雨の不安や心配を吹き飛ばすように笑い、力強い調子で言い切った。時雨は女の言葉に背中を押され、

「少し出掛けて来ます、もしかしたら帰って来ないかもしれません」

と言って、女の家を出た。

時雨は胸から飛び出しそうな熱い思いを押さえ込むことなく走る。駅を越え、静かな街を飛ぶように駆ける。執務室の灯りはまだ消えていない。

※

93 時雨と提督「恋煩い」

提督は男の妻から流れてくる情報を読みながら、夜が更けるのを待っていた。テーブルにはいつしか灰皿が置かれ、何本かの吸い殻が捨ててある。今も一本増えたところである。

つい先程、男経由で、時雨が鎮守府に向かったという連絡が来た。扶桑と山城に労いの言葉をかけ、時雨が戻ってくること、もし見かけたら執務

室に来るように伝え、臨時の任を解いた。

提督は自分の胸が騒々しいことに気付いた。提督はあれから、自らが時雨にどういう感情を向けるのか考えていたがまだ答えは出ていない。提督が時雨にそういう感情を向けるのが間違っている。と思う一方で、そういう感情を向けてもいいのではないかと思う己もいる。しかしその己は、提督という立場ではない己である。時雨と提督は、艦娘と提督という関係だからこそ成り立っている。どちらか片方が艦娘ではなくなったり、提督でなくなった時、この関係は確実に別の関係になる。

今まで維持できていた関係ではなくなり、それは人間同士で考えれば、恋愛関係というものになるだろう。その関係を提督と艦娘で成立させられるのだろうか。提督は成立させられないと考えている。

艦娘は機械であり、兵器でもあるのだ。人間と恋愛をする余裕などあるわけがない。もしそうなってしまえば、艦娘ではなくなる。しかし、時雨はそうなってもいいのではないだろうか。代わりの時雨は時雨として艦隊で機能している。戻ってくる時雨が、駆逐艦時雨として機能しなくても不都合ではない。こうなってくると今度は提督自身の振る舞いについて考えなければならない。

提督は時雨をどう思っているのだろうか。失いたくないという感情の果てには、一体何があるのだろうか。提督はいよいよその感情と向き合わなければならない時が来てしまったようだ。

執務室のドアが叩かれた。

「何だ？」

懐かしい顔がドアの向こうから出てくる。走ってきたのか白い頬は紅潮していた。時雨は息を整え、笑う。

「ただいま、提督」

時雨の笑みは提督が見たことないほど艶やかな色をしていた。提督は動揺を隠すように煙

草に手を伸ばす。時雨は提督が煙草を吸うのを見て、目を丸める。
「久し振りだよね？」
「ああ。着任依頼だ。それで、報告は？」
提督は全ての考えを胸の奥底にしまい、時雨の報告に耳を傾ける。煙草の燃える音だけが提督の耳に響いてくる。
「……時雨？」
「提督は、僕のこと、どう思う？」
提督は臆することなく、事前に用意していた答えを口にする。
「大切な艦娘の一人だ」
「他には？」
「他？」
提督の胸中に波が立つ。時雨が冗談を言っているようには思えない。提督はこの時、時雨の胸の苦しみが何から生じたものなのか気付いた。そして、女の家でその正体を教えられたことも。

時雨の胸の苦しみは提督への思いから生まれた。時雨が提督への思いを自覚した時、その感情は苦しみとして時雨の胸に住み着き、今では恋として時雨を突き動かしている。

提督は一貫して提督としての立場で時雨の思いを否定するべきだろう。しかし、今の提督は黙ることしかできなかった。煙草の火を消し、テーブルの下で震えるほど強く拳を握る。

この沈黙は決して、時雨の思いを肯定しているわけでもなければ否定しているわけでもなかった。時雨もそのことを分かっているのか、正直な思いを伝えてくる。

「僕は、提督と、提督と艦娘っていう関係だけで終わりたくないよ。僕は、僕はもっと、もっと特別な関係になりたい。もしなれるのなら、僕は……。僕は、艦娘じゃなくてもいい。提督も提督じゃなくていい。提督が提督だから、僕に命令を下すから指示を出すから、より特別な関係になりたいわけじゃない」

提督は時雨の素直な思いを聞き、胸が張り裂けそうになる。この時雨はもう提督の知っている時雨ではない。こんな感情を懐かせるために、より特別な関係に進展させるために、提督は時雨を秘書艦に任命したわけではない。ただ、最初に建造された艦娘であっただけだ。それがこうして、提督に恋心を懐くなど誰が想像できたであろうか。

97 時雨と提督「恋煩い」

提督が時雨の思いを拒んだ時、時雨はどうする気なのだろうか。おそらく、拒まれるとは思っていないはずだ。提督と時雨の間には沢山の時を共有してきた過去がある。その過去があるからこそ、受け止めてくれると信じているのだ。

しかしそれらの過去は、艦娘である時雨と提督の間に存在している過去である。艦娘でなくてもいいといったこの娘との間に、過去はない。しかし、この娘は時雨の記憶と思い出を知っているのだ。

提督は時雨の思いを踏み躙りたくなかった。しかし、提督は提督としての役目を果たさなければならない。この座を、たった一人の少女のために降りる気にはなれなかった。

提督は、時雨の思いに答える。

「私は提督であり、お前は艦娘だ。これはもう変えられない。どちらかがどちらかに恋をしようと、だ。そして私は嘘偽りで、お前の好意に同意する気はない。そして、お前に嘘偽りで好意を伝える気もない」

時雨の目に走る怯えや驚愕に、提督は胸が締め付けられる。こんな形で時雨と出会ってなければ、時雨の思いを受け止められただろう。もし、時雨が艦娘でなければ。

「……どうして？」
「どうして？」
「どうして、そんな……どうして？」
縋るように歩む時雨の瞳から涙が零れ、提督は思わず目を伏せた。震える手がテーブルに落ち、時雨は崩れ落ちる。嗚咽が、執務室に響く。提督は時雨を一瞥したが、その震える頭に触れられなかった。肩を震わせ涙する時雨にかける言葉を探した。
「済まない」
時雨の手が提督の詰め襟に伸び、強い力で握られる。一瞬息が詰まった。時雨を呼びかけることもできなくなった。時雨の震える指が襟から、肩をさ迷い、首へと伸びてくる。
「どうして謝るのさ。謝るなら……謝るんだったら、どうして！」
ほとんど悲鳴のような声を上げる時雨を見下ろしていたが提督は不思議なほどに落ち着いていた。そして、この後、時雨がどういう行動に移るのかも分かっていた。抵抗しようと試みたが、気付いた時には凄まじい力で首を締められていた。提督の身体が浮く。
気管が締められ、悶えるが時雨は一切を気にせず力を込めてくる。時雨は提督の首を締め

ながら、

「どうして……」

と問う。提督は答える代わりに両足をばたつかせ、もがき苦しむが時雨の耳には届いていないようだった。

薄れていく意識の中、どこかの鎮守府で艦娘が誤射をし、一人の提督が命を落としたことを思い出していた。己もそうやって一人の提督として死んでいくのだろうと思った。一人の提督として死んでいけるのならば、それで良いと思った。そのために提督はここに居たのだから。《了》